

ワイへの常連 ホントに凄いです



▼編集人です、こんにちは。この時期、恒例になりつつある、ドトールの快挙。先日、サイボウズ社内メールで正木店長より嬉しい報告をいただきましたので、皆さんも既にご承知のことでしょう。そうです。飲食部門で、堂々全国九位に食い込みました。またしても、海外研修の榮譽を勝ち取ったのです。凄い事です。今回は、FC事業室の元締、熊坂室長が渡航されるようです。さて、先日都内で行なわれた表彰式に出席した、正木店長からレポートが届いていますので、ご紹介致します。▼二月十五日、紺野社長とともに、ドトールオーナー会議に出席させて頂きました。懇親会のゲストは、なんとアントニオ猪木さんで、表彰式を含めて、一番盛り上がりました。ドトールの鳥羽社長のお話も直に聞くことができ、更に良いお店を作りたいと感じた日となりました。▼この懇親会の席上、社長は、鳥羽社長と同卓になった好機を逃さず、ドトール全店舗の廃棄物一元管理化を鳥羽社長その人にトップ営業を展開したところ、好感触を得たとのことです。表彰常連店舗だからこそ、このような栄に浴することができるとですね。おめでとうございます。

新春の集い 募金活動の報告

▼こんにちは。本社業務課の庄子です。今年の新春の恒例の募金活動を行いました。今回の目的は、先の震災で多くの子供たちが肉親を失い、加えて原動力災害により住み慣れた土地からも離れなければならぬケースも多く、幼い心に大きな負担がかかっていると思います。そんな中でも、震災前に抱いていたそれぞれの夢をあきらめず、前を向いて進んでいく

ことが出来るようにと、提案させていただきました。当日ご来場されたお客様からお預かりした三三、四二五円に、当社から一六、五七五円を加え、計五万九千九百九十九円、振込み致しました。写真は、新春の集い実行委員長である渡辺常務が、当社代表として、同課課長、穴戸志津子様へ目録をお届けした際の一枚です。



坂鶴黎明期 最高の写真とごま

▼こんにちは。坂鶴主任の渡辺です。当営業所の良いところをお伝えしたいと思えます。それは、「一人一人の思いがひとつになったこと」です。昨年一二月の五百トン。坂鶴鶴ヶ島営業所にとって、一つの区切りの目標でした。十月の新規開設、当然ゼロからのスタートでした。山口所長代理と私が異動し赴任、新人三名が難関を勝ち残り入社、計五名で新営業所の歯車が回り始めました。個性豊かな五名が、各人の持ち味を出しながら、手探りの営業所創りでした。オープン当初は、入荷も少なかったことから、山口所長代理は、一日中営業活動、他のスタッフも「お古紙下さい」のチラシ配布を中心に、時には、近くで廃品回収車の呼び声が聞こえれば、自転車まで追いかけ、ゲリラ営業を展開するなど、皆が臆することなく、一キロでも入荷を増やしたい、もっと活気のある営業所にしたい、その為に各々が出来ることに対し、本気になって取り組んでいました。勿論ここまで来れたのは、社長を始めとすると、多くの方々の御苦労と協力があってこそだと深く感謝しております。そして迎えた十二月、

目標五百トンに対し、五百三十三トンの集荷、見事目標を達成し、嬉しい年越しとなりました。実は、この月前半、入荷が今一つ振るわず、正直、無理なのはないかと半ば諦めかけた時もあったのですが、あるスタッフが発した「諦めちゃダメ！」の一言で、スタッフ一同、最後まで諦めることなく、目標に向かって一つになった気がしました。ところで、うちの所長代理は、いつも一番最後まで残り仕事をしていますが、スタッフが帰宅する際「お疲れ様でした。お先に失礼します。」と挨拶すると、毎回同じ言葉で返してくれま



良書紹介 今月は熊坂室長

「光圀伝」 沖方丁著 角川書店

▼水戸光圀と言え、そう、あの諸国漫遊世直し旅・天下の副将軍、水戸の黄門様です（実は世直し旅には出ていないのですが）。本作品は、六歳から、亡くなる七十三歳まで、彼の生涯を描き切り、まるで大河ドラマのような、いや大河ドラマを狙ってやるよ、と言いたくなるほどの作品です（今度会ったら聞いときます）。その生涯は、幼少時代から世子となつてからの青年期、それは切ないまでに悩み苦しむ様は痛ましくもあり、学問に目覚め、己の義に目覚めてゆくその姿は圧巻です。国を継いだ壮年、多くの師と友、そして近親者の死を次々と看取ってゆく光圀の姿は、その生涯を持って、今を生きる者にとっては想像もつかないほど、死が間近に迫る時代を生きた記録でもあります。日本人の多くが知る「光圀」は、時代を超えた有名人である訳ですが、研究者も多い黄門様の物語を書く事は大変な苦勞。一部漏れ聞こえて来たのは、資料だけで、前作「天地明察」の十倍を軽く超え、資料の読み解きに膨大な時間が掛かっているとの話でした。面白い時代小説というのは、特に実在の人物を取り上げる場合、史実資料を多方面から読み解き、その時代の事象に至った訳を推し必死を求め、資料としての理詰めの作業と（ノンフィクション部分）、物語として面白くなければならぬという、娯楽的要素を含めた上で会話を成立させてゆく（フィクション部分）を高次元で融合させ、その時代を生きた人間を見せて感じさせてくれた作品だけが、その称号を得ることが出来るのではないのでしょうか。本作は、まさに面白い！必読です！